

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく
社会背景の変遷と
望ましい将来像

STEP1

過去と現在を
知る

理解と情報共有を
促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会で対応

実現に向けた
課題と解決手法

STEP2

未来像実現に向けた
課題と解決手法を
考える

情報共有を踏まえ、まず「人の問題」をテーマに解決手法を検討

→ 市民会議
→ 地域部会で対応

STEP3

できることから
活動を
実践する

人と山村

森林

高度経済成長前から後へ

- 自給的経済、自立、自治、誇りがあった。
- 百業をやっていた。

- 若者が中下流の都市へ流出した。
- 拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がなくなった。

現代

- 山村における若者の就業機会が乏しい。就業できても定着できない。
- 現代では、山村は過疎化、少子化、高齢化、核家族化が進行している。

近未来
(放っておくとどうなるか)

- 限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニティが崩壊する。
- 国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。

望ましい
未来像

- 流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。
- 自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。

- 薪炭林施業が行われていた。
- 最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。
- 藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。

- もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。
- 国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。

- もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。
- 管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。

- 林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再生林の放棄が起こり、森林の水土保持機能が喪失する。
- 不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。

- 流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。
- 木材生産を主目的として管理する森林と、水土保持機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生(担い手作り)から！

当面の課題1 誰がやるか(人と地域の問題)

- 課題** ●現金収入、仕事、医療、教育など、出発点到達する以前の問題が山積。
- 解決手法(例)** ●既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定やEターンの若者のミーティングを通じ、山村再生の担い手作りを支援する具体的な方策を検討する。
- 上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興(流域フェアトレード)の推進(中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など)
- 役割分担** 市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために
先ず“人づくり”が必要
そのうえで“森づくり”にも
取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ

- 山村再生担い手づくり事例集
- 成功事例1
- 成功事例2
- 失敗事例1
-

当面の課題2 何をやるか(森の問題)

- 課題** ●流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
- データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。
- 解決手法(例)** ●「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
- モデル林の設定とモニタリング
→ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。
- 役割分担** 市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定

◆山部会 ①実績

課題	テーマ	解決手法	実際の取り組み
● 人と山村の課題	山村再生担い手づくり事例集 (流域圏担い手づくり事例集)	<ul style="list-style-type: none"> 森林の適切な管理は山村再生が重要。先ずは人づくりに取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> (平成25～平成27年) 平成25年から平成27年の3カ年に及び事例集の取材先は、64団体となり、取材者と取材先との新たな関係も生まれた。 (平成28年) 平成25年に訪問した取材先を対象に、再訪問を行った(その後、いかがお過ごしですか?プロジェクト) (平成29～平成30年) 「山村再生担い手づくり事例集」から「流域圏担い手づくり事例集」に名称を変えて、流域全体を対象を広げて取材を行った。 (平成29年～平成30年) 取材先と取材者、取材者同士のつながりを目的とした「事例集交流会」を行った。
	山村ミーティング	<ul style="list-style-type: none"> 山村再生を支援する取り組みへの参加・情報共有を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> (平成27年) 山川海流域フェスティバルの骨子を取りまとめた。中川町きこり祭(北海道)を目標に地域の祭の中で試験的に導入することが話し合われた。 (平成27年) 矢作川最上流端から河口までを自転車で巡る流域キャラバンが提案され、時期(夏休み)や対象者(小学生)といった詳細が検討された。 (平成29年～平成30年) 矢作川感謝祭を開催し、流域の森林組合(根羽・恵南・豊田・岡崎)が一堂にPRを行った。 (平成29年～平成30年) 矢作川流域林業担い手100人ヒヤリングを実施している。
	森づくりガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> 流域圏として統一性のある森林管理を行うためのガイドラインを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> (平成24～平成30年) 矢作川流域圏の森づくりや間伐の取組みについて情報収集を行った。 (平成27年) 額田木の駅プロジェクトが5月15日に発足し、順調に木材の搬出が行われている。根羽、恵那、豊田、岡崎と矢作川流域の4つの自治体で木の駅プロジェクトが稼働している。 (平成27年) 岡崎市では、水循環基本法(H26制定)の制定に先駆けて水循環推進協議会「緑のダム部会」が発足した。これに関連して、矢作川流域圏にモデル地域を設定し、適切な管理(間伐)と流量の関係について、定量的な検証が必要であるとの意見が出た。 (平成27年) 近自然森づくりを実施する、荒山林業を訪問した。 (平成28年) 流域という観点から、同様の課題を抱える神奈川県山北町の森づくりを学んだ。 (平成29年) 森づくりガイドラインの骨子について、情報共有と意見交換を行った。 (平成30年) 山川海の合同部会を設け、矢作川の特徴や課題について、学術的な成果を下に意見交換を行った。
● 森林の課題	木づかいガイドライン	<ul style="list-style-type: none"> 矢作川の森の恵みが中下流・海まで届くガイドラインを作る。 	<ul style="list-style-type: none"> (平成25年) 木材利用の推進について、WGにて「皆を木の世界に誘うためのプレーンストーミング」を実施し、特に青少年期に木の魅力や楽しさに触れることの重要性を認識した。 (平成25年) プレーンストーミングの成果を活かし、木づかいガイドラインの「ライフステージアタック表」を作成した。 (平成26～平成27年) 同時に、根羽村木づかいガイドラインの骨子として市民目線の感度によって「さあ～しよう」の形で産・官・学・市民の立場から、木づかいガイドラインを作成する方針「矢作川ディズ」を作成した。 (平成26～平成30年) 「矢作川ディズ」により、子供から大人に至るまで、様々な人生の場面で木の魅力を楽しんでいただく重要性を再認識し、木のアイテム「どこでもシリーズ」や「動く木のおもちゃ」を根羽村森林組合が中心となって開発し、「今すぐはじめる木のある暮らし」をテーマに「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を矢作川流域内において本格的にスタートさせた。 (平成26年～平成30年) 継続的な「木づかいライブ・スギダラキャラバン」の実施を通し、矢作川流域内のみならず、長野県や名古屋や東京からのオファーも増え、それらの出展等を通して、木の魅力や楽しさの認知度が拡大している。 (平成26～平成30年) 「流域ものさし」を流域共通のアイテムとして製作し、「私の流域物語」と併せた配布により、流域市民に対して、木づかいや身近な郷土樹種についての周知を進めようとしている。

山部会 ②成果（第50回山部会 WG 意見交換集約）

課題	テーマ	できたこと	もう少しでできたこと	できなかったこと
人と山村	流域圏担い手づくり事例集	<p>107 団体への取材を行い、6 冊の事例集を発刊</p> <p>取材者と取材団体のつながり、取材団体同士のつながりの構築（例：串原林業と ClearWaterProject）</p> <p>担い手の活動からの刺激、未来の可能性の把握</p> <p>流域の担い手の新発見（例：根羽村天下杉）</p>	<p>地域再生の起爆剤としての役割</p>	
	山村ミーティング	<p>流域林業担い手 100 人ヒヤリングの遂行（林業従事者の現状の把握）</p> <p>矢作川感謝祭への参加（主催者・出展者両面）</p>		<p>他部会とのコミュニケーション・出発点の共有</p> <p>流域内のものでしこの違いに対する理解</p> <p>山川海の経済的つながり</p> <p>河川整備計画と森づくりの関係の検討</p> <p>国の省庁の参加・県市村の前向きな参画</p>
森林	森づくりガイドライン	<p>自治体による水道水源モニタリングの実施（豊田市）</p> <p>木の駅プロジェクトの流域全体への拡大（全国的なモデル）</p> <p>流域自治体の間伐面積の可視化</p> <p>月瀬の大杉の再評価</p> <p>低コスト林業</p> <p>「根羽」「恵那」「豊田」「岡崎」の地域持ち回りのWGによる現状把握</p>	<p>源流域生態系の広域評価</p>	<p>流域すべての自治体の参加</p> <p>流域住民への発信</p> <p>山川海の連携の創出</p> <p>「土砂を流す森」モデル林の設定</p>
	木づかいガイドライン	<p>森林組合同士のつながりの創出</p> <p>奥矢作森林フェスティバル・矢作川感謝祭・三河湾大感謝祭・アンフォーレ市民フェス（安城）・あそべるとよたプロジェクトへの出店（木づかい推進）</p> <p>下流部の情報誌（例：耕 Life）を利用した上流域の活動周知</p>	<p>流域内の人材育成システム</p>	<p>自然生態系と人間管理生態系の最適配置についての検討</p>